

栃木県歴史文化研究会会報

特集 栃木の中世武士団と
本拠・城館

第 136 号

編集・発行

栃木県歴史文化研究会

事務局

〒320-0865

栃木県宇都宮市睦町2-2

栃木県立博物館内

TEL 028-634-1313

FAX 028-634-1310

郵便振替口座

00300-1-19207

特集 「栃木県の中世武士団と本拠・城館」

稲川 裕己

栃木県内の中世は、宇都宮氏、那須氏、小山氏、佐野氏など、多くの地域権力が存在した。彼らが支配拠点や軍事的な拠点としていたのが城館である。

県内の城館に関する話題には非常に富んでおり、昨年二月には鹿沼市で鹿沼城に関する企画展が開催された。また栃木市の西方城は、二〇二四年六月二四日（月）開催の文化審議会文化財分科会の答申で、「規模と構造の変遷が、地政的な北関東の政治的緊張と連動しており、戦国期から近世の政治状況、社会構造の変化を示していると考えられる。また、遺構の遺存状況も良好であり、我が国における中世後半から近世初頭にかけての城館の形態と変遷や築城技術を知る上で重要である。」と評価され、同年一〇月一日（金）の官報告示をもって正式に国指定史跡

に指定された。このほか、余湖浩一、渡邊昌樹『図説栃木の城郭』（国書刊行会、二〇二四年）が刊行された。また、

県内各地の城館跡では「御城印」が販売され、自治体ごとに優れたデザインが施され、遠方からも観光客が購入に訪れ、地域振興の一部になっている。

このように、県内の中世城館や本拠に関する研究は、着実な成果を見るとともに一般の関心も高い分野である。

栃木県歴史文化研究会では、かつて会誌である『歴史と文化』第三〇号（二〇二一年）で「特集「下野の城」にあたって」という特集を組んだ。その趣旨に見ると、栃木県が一九七七年度から実施した中世城館跡分布調査において四一〇箇所もの城館跡が確認された。その後も各自自治体による自治体史の編さんや文化財保護行政によって、新た

な知見が提示されたと記す。各論考は県内各地の文化財行政と城館の発掘調査に関わった方々による各城館についての成果が提示され、「県内の城館研究のさらなる進展の一助」となった。

しかし、こうした城館跡や本拠については、いくつかの問題点が存在する。以下、挙げておきたいと思う。

まず、第一点目の問題点として、学界的成果と一般の認識の乖離である。県内の城館跡の説明版や博物館のキャプションをみると、例えば方形居館は、鎌倉期に武士が拠点を置いたとの伝承をもとに記されているが、近年の中世史研究では、城館の立地や景観、信仰、治水などの様々な要素・特徴を、文献史料だけではなく、考古学の資料などから武士団の本拠を復原している。こうした成果が十分に一般にはあまり認知されてはいないようである。

第二点目は、自治体による調査・保護が行われる一方、開発行為などで所在や範囲などが分からなくなってしまうことが挙げられる。

上述の問題意識に基づき、隣県の茨城県では平成三〇年から令和四年度の五カ年に亘って遺構の所在や現況などを悉皆調査や古文書・古絵図などの史料に駆使し、「茨城県中世城館跡総合調査事業」が行われ、その成果報告書である『茨城県の中世城館』が刊行され、考古学に留まらない学際的な調査・研究によって新たな城郭の価値が見出された。現在、茨城県では調査に関わった研究者が、「茨城県郭サミット」を茨城県内で開催し、一般の人に向けて学術的な成果や魅力を発信しているという。

今回の大会では、栃木県内の各城館に関する成果を一般の人に向けてより広く知ってほしいとの思いから、「栃木県の武士団と本拠・城館」とのテーマを設定した。記念講演は城館や本拠研究の第一人者である落合義明氏（大東文化大学教授）をお招きし、「中世武士団の本拠研究の現在」との論題で、武士団の本拠に関する研究の現状をお話しいただく。また個別報告は、高見哲士氏（栃木市教育委員会）、鈴木芳英氏（那須烏山市教育委員会）、永岡弘章氏（鹿沼市教育委員会）に報告を依頼した。各報告者の内容や発表順については次項以降をご覧いただきたいと思う。

今大会が栃木県の武士団の本拠・城館研究の新たな段階へと向かう、一助となれば幸いである。